

地學雜誌第拾五輯第百七拾卷

明治三十六年二月十五日

論

說

(禁轉載)

南鳥島と北太平洋問題

(明治三十六年一月九日)
東京地學協會例會講演 (承前)

農學士 志賀重昂

それから其後に亞米利加人が段々東方の太平洋に向ツて手を伸すことになツて千八百三十年天保元年の記録に依ると同年にマサチューセツツ州のサボールと云ふ人がゼノワ人だのデンマーク人だの亞米利加人だのと云ふものを五人連れて小笠原島に来て、さうして移住したことがある。又其後に西班牙人、葡萄牙人が亞米利加の船に乗ツて布哇から小笠原島に移住した。又其の後千八百三十七年天保八年に亞米利加のシー、ダヴリユー、キングと云ふ會社の社長がモリソンと云ふを日本に出した、これより六年前即ち天保二年に亞米利加のコロンビヤ川の口に帆船に乗ツた日本の人が漂流して來た、其の人を連れて日本に送ツて來た、是は亞米利加では日本の幕府の様子を知らぬから此の日本人の漂流して來た者を連れて送ツて來たと云ふことになる、其の恩恵を日本人が感ずるに相違ない、それで一つ貿易を開こうと云ふことで日本の漂流人を連れて社長シー、ダヴリユー、キング自身が日本の浦賀に來た、此のキングが日本の事を書いた、是が亞米利加人が日

論 說 (南鳥島と北太平洋問題)

一三五 (1895)

本のことを書いた初である、和蘭人や英吉利人の書いた物は其前にもありませんが亞米利加人が日本の事を書いたのは此のシー、グヅリユー、キングが嚆矢である、是は日本を見て亞米利加の運命を書いたもので、亞米利加の最も高尚なる尊い行業は今將に舞臺にならむとする所即ち日本並に東洋——太平洋に見出さなければならぬと云ふことが書いてあります、此の千八百三十七年にモリソンの來た所の記録は日本に於て最も有名なる出來事を惹き起したのである、それは何であるかと申しますと活眼家として有名なる高野長英と渡邊華山の兩人であります、此二人がモリソンと云ふ人の記録に付て誤解をした爲に御承知の通り渡邊華山先生は切腹する、高野長英は捕縛されて牢屋まで切破つて出たが遂に脱がるゝ能はずして追手の來るを見て自ら首を刎ねて死んだのであります、それに付ては少しく渡邊華山と高野長英の價值を下げるやうなこともございませうけれども是は太平洋問題の一つの續として申上げます、それはドウ云ふのであるかと申すと華山も長英も「エケレス船」と其の著述に書いて居るから英吉利の船だと思つたのであります、是は全く右の如く亞米利加の船であります、そこで此のモリソン船の處置に付き幕府で評定したのが天保戌年の十月であります、即ち

御國政之大事一時摧蠻之御所置に付敢而君徳を薄し候道理は有之間敷候間向後彌右御書付村之趣を以而無二念打拂候義勿論に有之尤海岸御備之義は兼々向々に於而心得罷在候へは今般風説之様別段右之向々御沙汰には及申間敷義と奉存候右評議仕候趣書面之通に御座候書付五通返上仕候以上

戊十月

評定所 一座

と斯う云ふことがあります、それでモリソンと云ふ船の來たのは唯今申す通り日本の漂流民をダシに使つてやつて來て日本人と貿易させて貰ふと云ふ考であつた、幕府もこれと察したと見え、權蠻の御處置二念なく打拂へ」と云ふことに評決した、それを幕府評定所の書記芳賀市三郎と云ふが高野長英と渡邊華山の集つて居た尙齒會に來て、實は斯う云ふものがあると云つて懷中から出して、愈々モリソンと云ふ船が來たから之を打拂へと云ふ證定を内證で示した、それで是は由々しき大事だ、さう云ふ譯ではない、英吉利と云ふものはさう云ふものでない、モリソンと云ふのは船の名ではない、全くモリソンと云ふのは人間であると云ふことを高野長英も渡邊華山も言ふた、是は高野長英の「夢物語」と云ふ物がある。

甲問ふて曰くモリソンと申す者名の聞え候者に御坐候か承知仕り度云々

乙の人曰く……モリソンの英人なる事、其の博學多才なる事、漢字に精通する事、漢文の譯書ある事、大勢力ある事、高位位置の人なる事、日本の四、五萬石の大名と同格なる事等を精細に説けり、長英の「夢物語」に記載しあればこれを讀まるべし。

乙とは高野長英であります、

即ちモリソンと云ふはエライ英人である、それを打拂ふのは不得策なり、ヒドイと云ふことが夢物語に書いてある、それから渡邊華山先生の慎機論と云ふものに書いてあります、これにも同じく莫利宗^{モリスン}の英吉利國龍動の人なる事、五車韵府、周易通鑑綱目、東華錄、西域輿文地理誌を繙譯せし事

を記せり、精しくは「愼機篇」を讀まるべし

即ちズーツとモリソンの人物が書いてある、そこでモリソンと云ふのは船でない、斯う云ふ人間である、此のくらゐの人を打拂ふと云ふことは甚だ穩でないと云ふことを愼機論に書いた、それで文
明東漸史其他の著述には高野長英、渡邊華山は眞の活眼で幕府がモリソンと云ふ人を船だと思つたのに華山長英はユライ人間であると云ふことを知つて居つた、實に活眼であつて海外の事情に通じて居つたと云ふことが分る、それでモリソンの事を書いたものだから高野長英、渡邊華山の二人とも御處刑を受けて酷い目に遭つたのは全くそれから起つたのであります、即ちモリソン事件と云ふのが此の兩先生を地下に落さしめたのであります、併し是は高野長英先生も渡邊華山先生も間違いだ成るほどモリソンと云ふ人はあつたのでございしますが、是は支那の本を見ると清仁宗の嘉慶十二年に莫利宗と云ふものが始めて廣東に上陸した、此の莫利宗と云ふものは何であるかと云ふと大變漢學が出来て五車韻府とか色々漢文のムヅカシイやつを翻譯した、西洋人としてはユライものであることは人の知る所で、それからモリソンの傳を讀んで見るとロバート、モリソンと云ふてスコットランドで生れて千八百七年に支那に行つた、それが仁宗の嘉慶十二年に當りますから間違ひない、其のロバート、モリソンが支那に行つて支那學を勉強してバイブルを翻譯した實にユライ人でありまして、此くらゐの方があつた學者は稀有であります、即ち彼れの翻譯した總ての著述を部數にして見ますと大變なもので舊約全書も新約全書も支那語に翻譯し、又支那のを英文に翻譯したりして總て世間に廣まツて居る物が七十五萬百七十三部、ペーデにすると八億べ

「チ」と云ふものを書いた其の氣力のある事は實に驚くべきである、と云ふのでモリソンは有名なものになり、日本で一番高い山、即ち台灣の新高山は此の人の名譽を藉りて台灣占領前西洋人がモリソン山と云ふ名を附けた、それであるから其のモリソンの譯書を高野長英と渡邊華山先生が讀んで居たので其人に相違ないと思つた、故にモリソンと云ふ人間とモリソンと云ふ船と間違へた、此のモリソンと云ふ人の傳を見ると千八百三十四年の死去でありますから天保五年になります、天保五年に死んだとしますれば渡邊華山先生の書いた時と高野長英先生が書いた時にはモウ死んで仕舞つた後とで幽靈の來る譯も無いのであります、さう云ふ譯であつて高野長英、渡邊華山は實に活眼であるとか、海外の事情に通じて居るとか云つて大變に圈點を打つて文明東漸史等などにありますし今日にても種々の著書に右様の事が書いてあります、が全くそれは間違で、實は少し高野長英と渡邊華山の價打が下がる譯であります、がモリソンと云ふ人と船とは別だと云ふことを申上げて置きます、それからモリソンは英吉利人でありますけれどもドウして支那に來たかと云ふと亞米利加の紐育のエリハントと云ふプレスベテリヤン派の周旋であつて其の時に廣東に紐育のミルナー、エンド、ブルと云ふ會社があつて其の會社へモリソンが住んで居つたと云ふことでありますから當時米國が早くも大變に支那に手を出して居つたと云ふことはそれを以ても分る、それから其の後千八百四十五年、弘化二年に亞米利加のサツグ、ハアパーと云ふ所のマンハッタンと云ふ船が日本に來た、此の事は幕府の記録にも殘つて居ります、是は松平下總守からして届けたと云ふことが書いてある、それから亞米利加の記録を讀んで見ると、日本人から排斥せられ

て鐵砲を撃れたと云ふことでありますから全くそれに違ひない何ぜかと云ふと松平下總守は非常に賞められて居ります即ち。

全年三月十二日

追々御届申上候私家來共乗留候異國船房州館山浦に滯船罷在候處浦賀表より通辯之者差出相糺候處全處に滯船は西風を難儀に存江戸海え乗入度由に候得共右は難相成義に付浦賀湊に致入津候様相諭昨十一日酉の刻同所え致入津番等之義は於場所浦賀奉行より申達有之松平大和守家來一同警衛罷在候旨彼地出張之家來共より申越候此段御届申上候以上

三月十二日

松平下總守

全月十七日

今度渡來之異國船一昨十五日朝六半時浦賀表致出帆候付私家來之者爲見届房州洲之崎迄致出船候處帆影も不相見様相成候付歸船之上其段浦賀奉行え申届候處警衛之人數引拂御備場向平日之通想得候様大久保因幡守より申達有之依之平日之通相心得候旨彼地相話候家來之者申越候此段御届申上候以上

三月十七日

松平下總守

同年三月二十九日

金五枚宛

御書院番頭格

浦賀奉行

大目付

大久保因幡守
土岐丹波守

斯う云ふことで追除けたと云ふことがありますが、亞米利加の本にも追除けられたと云ふことが書
いゝある、大目付大久保因幡守と土岐丹波守と云ふ者が金五枚づゝ賞與として貰つたと云ふこと
が書いてある、マンハッタンと云ふ名は無いけれども和蘭人が書いた物を幕府で翻譯した者を見
るとそれに相違ない、さうして見ますれば亞米利加人が北太平洋に非常に力を今日まで振つた、又
其後に亞米利加の下院の記録にあるのを見ると紐育のゼードック、プラットと云ふ人が日本を開發し
なければいかぬと云ふ建議案を出した、さうしてプレーブル艦長のグリーンと云ふ者も亦此の東洋
の方を開發しなければならぬと云ふ議論を唱へた、記録によれば即ち亞墨利加鯨漁船マンハッタ
ン名船司メルカトル名八曆數千八百四十五年江戶港に至り日本漂民二十八人回歸せり但此漂民は
洋中に於て沈船になりて島に有りしを救助せし者なりと又其後千八百四十六年第七月共和政治
軍の水師提督ビートル名八其他士官等江戶港に至り其大度厚意懇雅を以て日本政府及び其民人に我
國風の高貴なるを示せりとありて是れはホンの一二の例に過ぎないけれどもペルリの來る前米
國の革命の戰爭が終ると同時に太平洋の方へ米國が手を伸さうとしたことが此の如く數ばある、
私は僅の間に調べたので決して完全な調ではありませぬが書いたのが是だけでもチヨットありま

すからモウ少し調べたら尙ほあるかも知れませぬが、是だけでも東洋の方即ち太平洋に手を伸ばさうとしたことが分る、それで詰りドウ云ふことになつて居るかと申すと米國西漸の力が布哇に來て、布哇からミッドウエー、バーム、リーフ、ウエークと云ふ此邊を占有し、一方に向つては南太平洋のサモア島を占領いたしました、さうして此のグワム、それから南島と云ふやうに段々と勢力が西漸して西班牙との戦争の結果比律賓島をも占有したと斯う云ふ譯になつて居ります、さうして北米の北端なるアラスカは御承知の通り露西亞の領分であつたのを亞米利加が買つたのでありまして中央には亞米利加の桑港とシヤトルと云ふものがあり、それから布哇、それからグワムの方から比律賓島と云ふやうに亞米利加人が占領した、それで能く此の節、北太平洋は亞米利加のレーク——湖水と云ふことが書いてあります、即ち北太平洋中の島々を飛石にして北太平洋を亞米利加の池にする積りである、それ故に此の飛石の如き南島も勢ひ池の中にありますからドウしても自分の國の占有にしようと思ふ考がある、又セワードだのブレイン有名な國務卿のブレインの言つたことに「太平洋岸の十一州は物産多くして帝國的のものである、此の帝國を大きくして太平洋に向つて手を伸ばさなければいかぬ」と云ふことを言つて居ります、それから上院議員のホワーと云ふ人北太平洋を指し「亞米利加の湖水」と云ふことを言ひ初めた、それから「亞米利加のレーク」と云ふ言葉が流行して來たのであります、又上院議員のドルフと云ふ人が申しますのに「モンロー主義など」と云ふことは尙ほ蝸牛が其の殻の中に這入つて居ると同じことであると言つた、それから又「殻の中に這入つて居る蝸牛」と云ふ言葉が流行つて來た、又上院議員レグと云ふ人は「亞米利加の本

城の方は確になつたから外に出て居る所の出城の方を今度は氣を付けて擴張しなければならぬ、外城を丈夫にしろと言つた、それでありませうから亞米利加人は歐羅巴に向ふよりも亞細亞に向はんとして居る。元來歐羅巴と亞米利加との關係は自然に悖つて居る、共に同じ物産で同じ物が取れて居りますから、それと互に交易をしようと言ふのは自然に悖つて居る、それが東洋の方でありませうれば亞米利加で出來ない茶とか亞米利加で出來ない養蠶とか云ふ物の出來る東洋の方と交易をするのが自然の順路であります、それ故に此の十年間に太西洋に向ふ亞米利加の船の噸數が減ると同時に太平洋に向ふ船の噸數が増えて來た、是は歐羅巴に向ふのは不自然であるから自然太平洋に手を伸して來るのは當り前でありませう、マアさう云ふ譯でマダ色々のこともありませうが、今晚は南鳥島と北太平洋との問題を御話する爲に第一に人間が殖えて來るに付ては海洋を利用すると云ふことを御話を致し、次に亞米利加西漸の力が北太平洋に及ぶと云ふことを申しさうして順序として幕府の記録と米國國會の記録とを申し上げますが、マダ此の外に亞米利加に色々本もありませうし幕府の本にもありませうからドウか皆さんも一つ御研究を願ひたいと思つてチヨツと御話を致しました (完)

四國中部の結晶片岩系

理學士 小川 琢 治